

近世期の「へんろ」と村社会

—— 往来手形と日記を通して ——

山本秀夫

はじめに

まず、テーマについて説明しておく。第一は、「へんろ」についてである。遍路という言葉が一般に使用されるが、この場合、遍路信仰という側面が強調されている。私があえて「へんろ」としたのは、へんろに信仰面とともに、旅の側面を加味して考えたいと思ったからである。第二は、村社会との関連性である。遍路信仰ということで「へんろ」ととらえようとしても、村社会の中からへんろ行がなされるわけで、村社会との関わりを議論することがどうしても必要であると考え。以上2点を念頭において、本報告では、へんろに関する往来手形（控）と日記を通して、近世期の地域社会のあり様（とくに近世民衆の旅の一側面）を探ることを課題としたい。

1 往来手形の中の「へんろ」

へんろに向かった人々の様子がわかる一つの例として、讃岐国直島（現 香川県香川郡直島町）の『三宅家文書』（瀬戸内海歴史民俗資料館所蔵）の中に、文化元年（1804）から明治10年（1877）の378通の往来手形の控が残されている。それをまとめたものが【表1】である。これによれば、378通のうち286通（75.7%）がへんろ関係である。往来手形の発行は、文政年間の84枚（うちへんろ分74枚）、天保年間の111枚（うちへんろ分83枚）を画期としている。文久4年（1864）分までのへんろ分は、ある程度の割合を占めるが、それ以後は小さい。幕末～明治期、直島からのへんろは減少しているが、この73年間に当時の推定人口900人前後の直島から、541人（年平均7.4人 そのうち男295人、女246人）がへんろに出ているのである。

へんろに出かけた時期は、2、3月そして7月の順で多く、農閑期を利用したものであることがわかる。また、旅の人員の内容（形態）を調べてみると、次の二点が指摘できる。第一は、男一人・女一人というへんろにおける単独行が活発であるということである。へんろの旅を大師とともに歩く「同行二人」の旅とすると、男一人・女一人のへんろ行は、まさに大師とだけの修行の旅と言える。第二は、女だけの事例の多さである。新城常三氏によれば、伊予小松藩の村々では、女性の伊勢参詣は総数の3%以下なのに対し、四国へんろになると、一挙にその10倍以上になるという（『新稿社寺参詣の社会経済史的研究』塙書房 1982年）。四国へんろとなると、女性の参加比率が高くなる理由については定かではないが、徳島藩などで八十八ヶ所を廻らないと嫁入りの資格がないとされる民俗的要因もさることながら、女性だけの旅が危険であるという現代的イメージを打ち消す理由がへんろ行にあることは確かである。ましてや、直島では、10～20代の女性も多く含み42名に正式なへんろが許されているわけで、村社会（村共同体）の中で、そういうへんろ行が是認されていたことを改めて指摘しておく。

【表1】 「往来手形の内訳」(「往来手形控」『三宅家文書』より作成)

年号	往来手形	へんろ	伊勢参宮	西国巡礼	稼ぎ	廻船	その他
文化元年	1	1					
2年	1	1					
3年	3	3					
4年	9	9					
5年	4	3					遠州秋葉宮1
6年	5	4					渡世1
7年	12	11					渡世大坂1
9年	5	5					
10年	2	2					
11年	5	4			予州銅山1		
12年	3	3					
13年	2	2					
14年	5	4					九州1
文政2年	1	0					用事(宇和島)1
3年	5	5					
4年	12	10					生魚売買2
5年	5	5					
6年	6	5		1			
7年	2	1					渡世1
8年	9	8		1			
9年	12	12					
10年	7	7					
11年	4	3			1		
12年	7	5					岡山へ2
13年	9	9					
天保2年	5	3				北国西国1	幸七船漁1
3年	4	2				堺屋船1	幸七船漁1
4年	3	1				堺屋船1	幸七船商売1
5年	4	3				堺屋船1	
6年	16	14				堺屋船1	茂右衛門船商売1
7年	9	7				堺屋船1	茂右衛門船商売1
8年	2	0				堺屋船1	中屋船商売1
9年	12	9				堺屋船1	中屋船商売2
10年	20	18		1			清兵衛船商売1
11年	3	2					重三郎船商売1
12年	17	14		1	1		伝左衛門船商売1
13年	6	6					
14年	2	2					
15年	2	1			大坂1		
弘化2年	3	2					伝左衛門船商売1
3年	1	1					
5年	4	3					境屋船商売1
嘉永2年	4	3					境屋船商売1
3年	6	4			児島1		清右衛門船商売1
4年	4	4					
5年	7	7					
6年	1	1					
7年	8	8					
安政2年	1	0					藤兵衛船生魚売買1
3年	2	1					堺屋船商売1
5年	11	9	1		1		
6年	2	2					
7年	1	1					
万延元年	3	0		1			船商売2(八右衛門・福松)

2年	1	1					
文久元年	2	2					
2年	7	3			1		福松船商売3
3年	2	2					
4年	9	9					
元治元年	3	0					船商売3 (福松・房吉)
2年	3	0					船商売3 (福松・九郎兵衛)
慶応元年	2	0					船商売2 (助右衛門・藤兵衛)
2年	1	0					兼松船商売1
3年	1	0					甚七船商売1
4年	5	2		1		2	
明治元年	2	0				2	
2年	10	2	5	3			
3年	3	2			魚漁稼1		
4年	15	2	1		邑久2	6	船商売4 (福松・九郎兵衛)
5年	3	3					
6年	1	1					
8年	1	1					
9年	7	5		2			
10年	1	1					
合計	378	286	7	11	10	18	46

2 へんろ日記の中の「へんろ」

江戸時代中期から後期にかけて、一般庶民のへんろが隆盛になっていき、そういった中で、大庄屋や庄屋などの裕福な農民たちも、自分の足でへんろ道を歩き、貴重な旅日記・道中記録を残している。このことは、愛媛県生涯学習センター発行の『四国遍路のあゆみ』（2001年）でも指摘されており、その中で11事例が紹介されている。本報告では、讃岐を中心に4つの事例を紹介し、若干の指摘をすることとする。なお、近世期のへんろの実態を知るには日記が最適である。しかし、従来、それを細かく見ていくことがあまり行われていないように思われる。そこで、本報告では、日記の内容を表にまとめたり、史料全文を提示した（ただし本稿では省略した）。

(1) 「四国辺路中万覚日記」（延享4年）（瀬戸内海歴史民俗資料館所蔵）

①丸亀藩領井関村と佐伯家

井関村の天保期の村況は、村高94石、家数77軒、人数401人である。佐伯家は、寛文5年（1665）より井関村庄屋となり、宝暦10年（1760）からは内野々・有木・海老済・田野々村の4カ村の庄屋も兼帯する。

②道程と宿

佐伯藤兵衛は、喜四郎・久五郎・喜右衛門とともに、延享4年（1747）2月27日～4月10日の43日間、へんろ行に出た。一行は、琴弾八幡宮を皮切りに、讃岐・阿波・土佐・伊予・讃岐の順に進む。とくに、延享期のへんろは、大窪寺から切幡寺へと日開谷を経て進んでいることがわかる。宿は、ほとんどが知人や庄屋宅である（33回）であるが、3月9日には鶴林寺、4月4日には岩屋寺に泊まっている。当時のへんろは札所に泊めてもらえなかったという指摘（『香川県史』1988年）がある中で、稀有な例である。また、3月18日の項には、「遍路屋」（辺路家）の記述がある。一行が高知に来たとき、喜四郎が足を痛めて逗留することになる。当時、土佐藩では、へんろの領内通行期間を規定していたが、足痛でこの制限日数を超えるので手形の書き換えをせねばならない。しかし、相対の宿ではそれができないので、遍路屋に泊まろうとした。だ

が、「辺路家殊之外ふきれいに而難義仕候所」として宿を換えている。当時の辺路家は病気へんろの収容所的役割を果たしていたとされる。金銭に余裕があり、道中記を残すようなへんろは、これから遠ざかっていったようである。

(2) 「四州行程記」(文政2年)(『高瀬文化史』2003年所収)

①多度津藩領羽方村と森家

多度津藩領羽方村は、貞享期、村高約495石、家数156軒の村である。森家の初代は、田口勝右衛門で、生駒藩2代目一正の家臣であったが、生駒騒動(寛永14~17年)後、浪人となり、神田村内羽方村に移り住み、以後庄屋役を勤めている。

②道程

森在満は、手代とともに、文政2年(1819)3月15日に立出し、閏4月18日に、63日間で廻り帰宅している。この史料が所収されている『高瀬文化史』(2003年)では、「景色至ってよし」「道甚だ難所」「大寺也」など、短くまとまった形でつづられていることをこの史料の特色としているが、私はそれ以上に、旧跡を訪ね、和歌を記録していることを強調したい。

(3) 「四国順拝日記」(天保12年)(岡山県吉井町「角南家文書」)

①備前藩領下塩木村と角南恵左衛門

次に対岸の岡山(備前藩領)からのへんろ行の日記を見てみよう。下塩木村は、近世中後期、村高62石余、家数15軒、人数55人の小さな村であった。

②道程

下塩木村の庄屋(名主)の角南恵左衛門は、他の5人とともに、天保12年(1841)閏正月22日出立し、3月13日まで廻っている。雨の日が15日と多く、結局51日間を要している。

この史料の特色は、月日・札所・宿所の他に、宿代・木銭・米代を細かく記していることである。田ノ口(現岡山県倉敷市)から丸亀へ渡り、金毘羅参詣のあと善通寺が札はじめである。村人宅への宿泊がほとんどであるが、2月10日のさばせ村、3月9日の阿波井村では庵に、3月4日には「きくま茶屋」、3月10日にも茶屋に泊まっている。宿料などについては、1月26日の天皇村から2月8日の阿せり村までは木銭(15~20文)と米(82~124文)という形で、それ以降は宿料(67~125文)と米(80~130文)という形で払われている。また、「善言」については、1月29日井土村、2月6日徳島で受けている。なお、3月4日には10度、同月5日には5度というように、接待の多さに驚かされるとともに、「ぜんごん」であっても、少ないながら宿料を払っていることが注目できる。

②餞別と土産物

さて、この史料の最後には「村方惣樽金受納」と「産ケ物配」という記述がある。村中や相役である他村の名主及び檀那寺などから餞別が寄せられ、恵左衛門もそれらに対する返礼として土産物をきちんと買い込んでいる。なお、四国での買い物が、上方に比べて、風呂敷・木杓子・杉箸・扇子など実用的なものであることが興味深い。また、出発前か帰宅後か不明であるが、樽開きをして近隣の人々に酒の振る舞いをしていのも、共同体的な付き合いの中で旅が位置づけられている様子を示している。このように、親類や相役・近所などに支えられ、それらと深く関わり合いながら行われていることから、近世の旅が人生のハレの行事であり、先の通過儀礼と同じ社会的な意味を持っていたことを知ることができる。近世文学研究者の板坂耀子氏は、旅に出発する前の準備期間において、もうすでに旅が始まっていると指摘している(『江戸の旅を読む』ペリかん社 2002年)。つまり、「非日常の旅」の準備が日常の中で始まっている。村をあげての餞別

などは、それに該当すると考える。

(4) 「四国道中日記」(天保13年)(香川県立文書館架蔵紙焼本を閲覧)

①丸亀領生野村と高田家

丸亀領生野村は、天保期、村高約1090石、家数234軒、人数910人の、札所善通寺の北方に位置する村である。高田家については、不明な点も多いが、正徳4年からの系図が伝来しているようである。

②「ぜんごん」

高田虎蔵広親は、総勢9名で、天保13年(1842)1月30日～3月13日、44日間で廻っている。その間、ぜんごんは8回、木賃宿は30回、旅籠は2回となっている。特に興味深いのは、宿の内容を「極上の宿～粗末な宿」などのように、大変細かく記していることである。たとえば、2月6日の項で大窪寺門前の宿について、「門前ニ小き宿屋御座候へ共、甚見苦敷候ニ付、最早日も暮合ニ相成候共、右様見苦敷宿ニ付、同所ニ而此先ニ宿屋ハ無御座候旨相尋候処、先き江行候へバ式里程も先江不參而ハ宿屋ハ無御座候」と、宿屋が不足していることを指摘している。一方、木賃は2～12分となっている。

③「接待」

次に、接待について、史料から見ていくと、二点が指摘できる。第一は、接待の内容である。食べ物・草鞋・銭の3種の接待を受けている。食べ物としては、いものめし・餅・豆のめし・琉球いも・いりもの・赤飯・おちらし・あづきまま・とうきび・香のものであった。第二は、接待の形態である。特徴的なのは、2月15日の観音寺、3月4日の大洲での「村中寄合」による接待である。村社会としての接待と理解したい。加えて、これは、へんろを村社会全体で迎えるという姿勢であるが、庄屋所でそれは行われず、一軒の家で行われていることにこそ、へんろに対する接待の特徴があるように考える。

おわりに

本報告で強調しなかった点を述べておく。

第一は、へんろを村社会との関連の中でとらえたかったことである。へんろを近世社会の中に位置づける場合、村社会から出かけて行くへんろ、他の村社会に迎えられる(あるいは排除される)へんろ、そして、その間の動向をもつかむことが必要だと考える。従来、へんろ日記の研究は、へんろ行の間の動向をのみつかむことに終始したように思われる。出発前後の村社会の分析を含めた研究も必要であろうし、ましてや庄屋層のへんろ行となれば、このような視点は不可欠だと思う。本報告で少し採りあげた往来手形の分析も、その点重要な方法論であろう。その多くはすでに喜代吉栄徳氏らによって緻密に行われており、これらが蓄積されることで、へんろ行が村社会にとって重要な出来事であったことを証明できると考える。

第二は、へんろ行の性格付けについてである。へんろを近世民衆の旅として考えると、それは、へんろの「共通性」ということばで表現されるであろう。一方、善根宿や接待ということになれば、それはへんろの「特殊性」ということになるだろう。どちらもへんろ行は含んで考えるべきである。